MESSIANIC JOURNAL
ヴェハスケル
VEHASKEL
"Acknowledge Me" Jer 9:23
Winter 2013 / 5773
イスラエル聖書大学発行

ユダヤ人の研究における
イエスの復活

終焉を見据えて
年を重ねることは神の祝福である

選びか被害者か
イスラエルにおける売春禁止法

編集部から

編集者からひと言

昨年、多くの方が「社会正義」という言葉を耳にしたことでしょう。「Vehaskel」【ヴェハスケル】創刊号では、近年の抗議活動で唱われている「社会正義」とは違った角度から「社会正義」について議論する場を提供しようとしています。アナット・バーナーとマティ・ショシャニの記事はイスラエルの売春問題をそれぞれ異なった視点から扱っています。しかし両者とも、売春が当事者だけでなくイスラエル社会全体に傷跡を残すことを指摘しています。

この週末『ハアレツ』紙 (Vered Lee, 08.15.12) に載った記事「売春界の朝番」では恐ろしい事実が明かされています。女性達 (全て母親、中には妊娠後期の女性も) が「朝番」で売春をする様子です。彼女達は幼稚園や学校から帰宅する子供の育児をするため早朝働きに出ます。衛生局の移動式クリニックで売春域を巡回している治療カウンセラーのマヤ・パレイさんはこう語っています。「そこに入ると一瞬、普通のオフィスのような印象を受けます。シフト、仕事、スタッフ、店員などという用語が使われています。これは売春を「一般化」し、業務をルーティン化させ、そこで本当に起こっていることを一般の業務に見せるための偽装行為です」

アナット・バーナーの記事は、売春の現場に関わっている人々の実体験を通して、売春による搾取の実体を明かしています。マティ・ショシャニはこの問題を法的観点から批判し「イスラエル司法省」による訴状を挙げ、イスラエルの売春を根絶しようとしています。

以上のような「社会正義」のテーマに加え「高齢者と聖書的な介護」についてジョニー・フリが書いた記事を掲載しています。この特集記事は新年祭の時期に組まれましたが、これは偶然ではないと思っています。この新しい雑誌の創刊号が、新しい年に発行されることになったのです。その他にも様々なテーマに関する記事を掲載しています。これらの記事は全てヘブル語で、イスラエル人の記者によって「まことは地から生えいでる」 (詩篇 85:11) という信仰のもとに書かれています。

この雑誌の使命は、メシアの体に仕え、聖書の地において神が育んでおられる貴重な「資源」をもとに、価値のある情報を発信していくことです。最後に、この場を借りて昼も夜もこの創刊号の発行の為に働いてくれたスタッフの皆さん、記者の皆さんにお礼を申しあげます。

皆さまに「Vehaskel」【ヴェハスケル】を楽しんでいただき、ここで発信される情報が皆さまの助けとなることを心から願っています。コメントもお待ちしています。

祝福がありますように。
ゴラン・ブロッシュ

Editor: Golan Broshi
Editing: Maya Rechnitzer
Proofreading and Editing: Mona Peled
Layout Design: Ruth Winkler

Japanese translation & Layout Design: Hiroshi Nakagawa

© All rights reserved.

The articles in this magazine reflect the opinions of the authors only.

『聖書の民イスラエル』 4

6 『仮面を被ったキリスト教』

「『パンは肉を表し、ワインは血を表す』ユダヤ教ラビのブロッド師、まるでキリスト教のような教えで、ユダヤ教正統派の中で物議をかもす」

ユダヤ人の研究における
イエスの復活 7

9 終焉を見据えて

年老いた時も、私を見放さないでください。私の力の衰え果てたとき、私を見捨てないでください。

本人の選びか
それとも被害者か？ 11

JERUSALEM INSTITUTE OF JUSTICE 14

イスラエルにおける
売春禁止法

16 インターネット vs リアル

インターネットには顔と顔を合わせた交流にはない利点もある。

『聖書の民 イスラエル』

Israel is placed second in the world in book publishing per person

聖書の民であるイスラエルは
「ザ・ブック（聖書）の民」と呼ばれる。
「本の民」の呼び名にふさわしく
イスラエル人口の 54% が 3 ヶ月に
1 冊のペースで本を読む。

イスラエルで読まれる書物（新聞、雑誌、デジタル文書を含む）の総量は世界でもトップクラスだと言われています。一人当たりの本の消費量は、世界第２位です（http://cafe.mouse.co.il）。この「ザ・ブック（聖書）の民」から、キリストに関しても、ヘブル語の文献が数多く出されることを期待しています。

私は数年前から、イスラエル国内のアラブ人やメシアニック・ジューの様々な声が発信される刊行物が必要であると感じていました。多くの人にそのビジョンを分かち合い、祈りを捧げてきました。この度、ついに時が満ち、人材や資金が与えられ、創刊にまで辿り着くことができました。

創刊に向け三年間にわたり、イスラエル聖書大学のスタッフが音頭をとり、イスラエル国内のリーダーやメシアニック・ジューの会衆に集う人々を招き、話し合いをしてきました。様々な意見交換がなされ、雑誌の特徴、内容、その他出版に関する具体的な事項が決定されました。そして、昨年、編集部が発足し、内容に関する方向性と雑誌名「Vehaskel」が決定しました。（名前に関しての説明は、ヘブル語版にのみ掲載）

最後に、ご理解いただきたいのは、『Vehaskel』【ヴェハスケル】はニュースレーターでもイスラエル聖書大学のジャーナルでもなく、イスラエル国内のメシアニック・ジュー全体の声を表す『ユダヤの笛』であるということです。イスラエルの地で叫ばれる声は、時が満ちれば、他の言語に訳され、世界の国々を祝福することになるでしょう。『Vehaskel』は聖書的、神学的なテーマを取り上げるだけではなく、イスラエル国内の信者の生活に密着した実践的なテーマに関する意見交換の場を提供したいと願っています。つまり、これは学術雑誌ではなく「イスラエル国内の信者の声をヘブル語で発信するものである」ということです。イスラエル国内の読者からの投稿を、編集担当のゴラン氏も心待ちにしています。

“ああ、イスラエルの救いがシオンから来るように。

詩篇１４章７節”

メシアの祝福とともに

エレズ・ソレフ

仮面を被ったキリスト教

ゴラン・ボロッシ

「『パンは肉を表し、ワインは血を表す』ラビのブロッド師、まるでキリスト教のような教えで、ユダヤ教正統派の中で物議をかもす」

という衝撃的な見出しがハアレツ新聞に掲載された。 (2012/4/20 Yair Ettinger)

この記事によると、ラビのメナヘム・エリザー・シャック は『ハバット（ユダヤ教正統派の中のハシディズム運動）は最もユダヤ教に近い（別の）宗教だ』と批判している。また、超正統派の一部からは「表向きには隠しているが、その実体はキリスト教である」との声まで聞かれる。

ハバットのスポークスマンでラビのメナケム・ブロッド師は良く知られている正統派のインターネット・フォーラムサイトで「罪の贖いを信じ、これを期待し、強められようではないか。過越祭７日目の「メシアの食事」が私たちの血となり、肉となるように、メシア来臨への信仰もまた、私たちの血となり、肉となる。最後の過越祭をメシアと共に第三神殿で祝おうではないか」と発言し、物議をかもした。

「たしかにブロッド師は、極端なメシアニック思想の支持者ではない。（ハバット運動最後のラビ、メナヘム・メンデル・シュネールソン師は実は死んでおらず、彼こそがメシアであると信じる者たちもいる）しかし、パンとワインが肉と血に変わったという考え方は、カトリックそのものである。それはイエスが弟子達とした最後の晩餐のシンボルであり、新約によれば過越祭の間に起きた出来事である」と記事は指摘する。

記事の後半はブロッド師が事態を鎮静させようする試みを伝えている。「食べ物によって霊的価値があるものが、体に流れ込むというアイデアはユダヤ人の伝統的な考え方であり、神殿時代に生け贄にされた動物の肉を食べる習慣、安息日や祭りの食事を食べる習慣等に反映されている。ハバットのラビは何度もこの『メシアの』食事を食べることでメシアの来臨が私達のものとなり、マッツァ（酵母の入らないクラッカー状のパン）とワインは私達の体の一部となると説明してきた」

19世紀を通して
伝統的にユダヤ人が避けていた
イエスに関する論文を書いた
ユダヤ人の学者たちがいた。

ユダヤ人の研究における イエス・キリストの復活

デイビッド・ミシキン

約 2000 年間、イエスに関する研究がユダヤ人の学者によってされることはなかった。「特に関心が向けられなかった」または「故意に避けてきた」とも考えられる。しかし、19 世紀、2つの出来事によってその状況は一変する。

一つは、ヨーロッパで起こった啓蒙運動である。（ヨーロッパのユダヤ人内の啓蒙運動「ハスカラー」も後続する）このことにより、ヨーロッパのユダヤ人は、一般の文化や学問の世界に参加できるようになり、数百年ぶりに、ユダヤ人が正規の学生として大学に入学できるようになる。

二つ目は「もう一つのキャンプ」と呼ばれるクリスチャン思想の影響である。リベラルなクリスチャン学者の間で始まったこの動きは、批判的な視点で、新約聖書の記述を細かく検証するというものである。彼らは「史的イエス」像を吟味し、調査した。それは、超自然的なメシアではなく、歴史上の人物としてのイエスに着目し調査するものであった。この新しいアプローチはヨーロッパに住むユダヤ人学者の興味を引き、彼らも同様にイエスを神ではなく人間として、キリスト教の信仰から切り離して研究するようになった。このことによって、19 世紀には、多くのユダヤ人学者がイエスに関する研究に取り組むことになる。

この新しい動きは 20 世紀に入り、更に広がり続けた。「イエスは誰か?」これが争点となる。ユダヤ人学者はイエスを実在した歴史的人物と捉え、彼がユダヤ人だったことを否定しなかった。その事実は否定することができなかったからである。それでは、キリスト教が何百年もイエスに関して主張し続けていることはどうだろう。歴史的事実として認められるのだろうか。

過去１世紀にわたり多くの学者がこのムーブメントについて書き残し「イエスのユダヤへの回帰」とまで言われるようになった。

イスラエルではこの動向を調べている作家がヘブル語で２冊の本を出版した。

1.「他人兄弟：２０世紀ヘブル文学におけるイエス」スタル・ネタ 2004 年

2. アヴィガー・シンアン教授「あの人：イエスを語るユダヤ人」論集。1999 年

イスラエルの学者たちは幾度となくイエスの教え、技法、内容について議論してきた。「メシア」という考え方や「史的イエス」と伝統的な見解との違いについては、少なからず議論されてきた。しかし、議論されなかったことが一つだけあった。それは、イエスの復活についてである。

イエスの人生の出来事を網羅しようとする時、復活のテーマは主に二つの方法で扱われてきた。一つは事実を説明するための代案を提示する。もう一つは完全に無視するという方法である。歴史学者のヨセフ・クロウスナー教授とイスラエルで著名なデイビッド・フラッサー教授が書いた話題の二冊の本の中でもイエスの復活は同様に扱われた。

イエスに関するエッセイが初めてヘブル語で発表されたのは20世紀初頭である。

20 世紀初頭に、歴史家ヨセフ・クロウスナーが「ナザレのイエス：彼の時代、人生、教え」を出版。（1922 年）これが最初に出版された、ヘブル語のイエスに関する本である。本全体の印象はイエスに対して好意的であり、宗教的ユダヤ人は、この本が書かれたこと自体に強い反感を示している。クロウスナーは「イエスの復活」にも触れ、復活に関わりのある出来事に関して、個人的な見解を述べている。下記参照。

1. 墓は空であったこと：著者はアリマタヤのヨセフが遺体を盗んだに違いないと説明。

2. 復活後にイエスが弟子達の前に現れたこと：著者は、弟子達は幻想を見たとした。

3. パウロがダマスコに行く途中、十字架で死んだはずのイエスに会ったこと：これに関しても新説が唱えられる。クロウスナーの考えでは、パウロはイエスの十字架刑を目撃し（聖書には書かれていない）、ステパノの石打の刑の証人でもある。（使徒の働き７章）これらの２つの衝撃的な出来事が彼に精神的作用を与え、生き返ったメシアを見たと信じ込むに至ったとされる。

多くの研究者と同じく、クロウスナーは新約聖書に書かれている出来事が歴史的に否定できないこと、従って扱わざるを得ないことを理解していた。しかし、彼は、この問題に正面から取り組むことを避けた。そして、事実無根の想像の上に展開される理論を唱えた。復活を信じるよりも、クロウスナーの仮説を信じる方が難しいと言わざるを得ない。これこそが、近年学者達が直面している難問である。また「復活」の問題が往々にして無視されてしまう理由もここにある。

もう一人の権威、デイビッド・フラッサー教授がイエスについて書いた時も同様であった。彼は、2000 年に亡くなるまで、エルサレムのヘブル大学の元副教授を務めていた人物である。彼の本「イエス」は母国語のドイツ語で書かれ、他の言語に訳された。

フラッサーはクロウスナーと違い、イエスの復活を説明しようとはしなかった。イエスの人生を深く論じた後、彼は復活に関わることを全て割愛した。フラッサーが取った方法は後者の「沈黙による主張」と言えるだろう。

過去１世紀のユダヤ人によるイエスの研究は、総合的には、肯定的な流れと言えるだろう。この流れが継続し、より多くのヘブル知識人が新約聖書の内容を真摯に受け止めるようになることを願っている。更に「イエスの復活」が、その歴史的事実に基づいて議論され、研究の対象として認

められていくことを願う。「異邦人の使徒」でありヘブル人のパウロ（タルソのサウロ）は「もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになろう。（第一コリント 15:17）」と書いている。歴史な根拠に基づいた「復活」こそが、イエスへの信仰の基盤なのである。

終焉を見据えて

ジョニー・フーリ

「老い」は屈辱的な言葉だと言う人々がいる。本当にそうなのだろうか？

神の言葉（聖書）は、年を重ねることは神の祝福であり、長寿こそメシア的王国の特徴だと教える。しかし残念なことに、多くの老人が正反対の経験をしている。何故だろうか。

まず始めに自然の成り行きとして、年を重ねると社会的、経済的、肉体的に失うものが増える。長寿となればなおさらのことである。ソロモン王は年を重ねると共に、経験する変化にどう対応すべきかについて言及し（伝道者の書 12:1-7）老後については「…わざわいの日…『何の喜びもない』と言う年月…」と語っている。肉的な見方で「老い」を考えれば、気がめいるものである。

しかし反対に、パウロは霊的な見方で私達を励ましてくれる。「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（第二コリント４章 16 節）」内なる人が新たにされるとは霊的な変化が起こることであり、神と個人的に交わる事にも密接に関係している。

更に聖書によると、神は老人に対して尊敬と配慮を持って接しなさいと命じている。「あなたは白髪の人の前では、起立しなければならない。また老人を敬い、あなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」(レビ記 19:32) この箇所のヘブル語テキストを参照すると、年長である

ことを尊敬すると同時に、人として尊敬することも含まれている。聖句の後半は尊敬と配慮は神への誠実さからでるべきであり、それは神に対しての義務であるとする。同様にパウロはテモテ（壮年の長老）にこう伝えている。「年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。中略　年とった婦人たちには母親に対するように…勧めなさい（第一テモテ５章 1-2 節）」

出エジプト記 20 章 12 節の十戒には「あなたの父と母を敬え」とあるが、これは正しく接するという意味だけではなく、両親の必要に答える、つまり養うという意味でもある。老人の必要に答える事は、聖書的家族のあるべき姿であり、神を正しくほめたたえることでもある。

「もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。（第一テモテ５章８節）「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児ややもめたちが困っている時に世話をし、この世から自分をきよく守ることです（ヤコブ１章 27 節）。」家族が必要な支援をすることができない場合、老人への責任は「会衆 (教会)」が持つ

ハイファにあるケアハウス「Ebenezer」

べきである。（使徒の働き６章１節）

私達の中で、老人を養い敬意を示すものは誠の愛の業を行う、生ける証人である。実際、ヤコブ、ペテロ、ヨハネ、バルナバ、パウロは、使徒としてユダヤ人と異邦人の必要に献身的に答えていた（ガラテヤ書２章 9-10 節）。

しかし老人には肉体的な必要以上に精神的、霊的な必要があることを見逃してはならない。老人を訪れ、聖書を読み、祈り、歌い、何よりも耳を傾けなければならい。老人は肉体的には、老いを感じていたとしても、耳を傾けてもらうと、花が咲いたように元気が出るものである。

「彼らは、主の家に植えられ、私達の神の大庭で栄えます。彼らは年老いてもなお、実を実らせ、

年老いた時も、私を見放さないでください。私の力の衰え果てたとき、私を見捨てないでください。詩篇71:9

みずみずしく、おい茂っていましょう。こうして彼らは、主の正しいことを告げましょう。主はわが岩。主には不正がありません」(詩篇 92 章 13-15 節)。老人は「信仰によって歩む人生の恵み」を証しする器であり、その祝福を分ち合う機会を待ち望んでいる。実体験を通して養われてきた老人の知恵は、どんな技術革新によっても取って代えることはできない。「老い (古い)」という言葉は美しく、品格があり、聖書では実質と美徳に溢れている。そこで、大切なことは、私たちにとって「老い」がどのような意味を持つかである。

私達が抱いている「最後の時」はどのようなものだろうか。高齢者を大切にするということは、何を言うかではなく、何をするかによって評価されるものである。

私は、主からの語りかけを通して、この分野で仕える召しを明確に受けた。まず、ケアハウスのマネージメントを学校で学び、それから、ハイファにある「Ebenezer」というケアハウスで 1998 年からパートタイムで働き始めた。このケアハウスの目的は高齢者に適切な介護をすると同時に年老いた兄弟姉妹に霊的な家を提供することである。老人に仕え、その家族にも、会衆にも仕える働きである。もちろん、私達が家族や会衆の役割を代行できるわけではないが。

本人の選びか それとも被害者か？

アナット・ブレナー

ウクライナの人身売買被害者、アニアの証言

アニアは10年前、聡明で、魅力的な女性に出会った。その女性は「月に1000ドルは稼げるから、イスラエルで介護の仕事をしてみないか」と誘ってきた。アニアは友達とエジプト経由でイスラエルに入国する際、ベエル・シェバまで6日間も歩いた。その間、彼女たちはベドウィン達に殴られ、ひどい屈辱を受けた。国境に着くと目隠しをされ、ミニバンに乗せられてリソン・レジオンへ連れて行かれた。殴られ、激しく揺れるミニバンの床に寝かされていた彼女たちの体は、痣だらけになっていた。リソン・レジオンでは他の女の子達と共にアパートに監禁された。売春業者が来ると彼女たちは裸にされ、その中から選ばれた子が連れて行かれた。

それから何日も売春を強いられたが、ようやく警察が彼女たちを売買していた男を逮捕した。パスポートがすでに取り上げられていたため、帰国することもできず、イスラエルの人身売買被害者保護施設で生活するようになる。それから何年も経った今でも、アニアは恥ずかしめを受けたこの国で、尊厳を持ち暮らせるよう法的に戦っている。

「アバンダント・ライフ」は胎児と女性の健康を守る団体である。2007年から、売春目的で海外から連れて来られた女性も含め、売春に関わっている女性を助けている。その活動の中でまず問題になるのが「密かにアパートに監禁されている女性達をどのようにして見つけるか」ということである。しかし驚いたことに、最初に会うことができた女性はウズベキスタンから人身売買によって連れてこられた被害者であった。彼女については後に詳しく述べよう。

90年代からイスラエルは人身売買のターゲット国の一つになった。人身売買の問題はソビエト連邦の崩壊と、それによる世界経済と社会の変化によって広まった。何百万人もの社会保障が揺るぎ、生活の場や命までもが危機に曝された。旧共産主義国のセーフティーネットが崩壊したことと、法執行機関と国民の無関心が女性の人身売買を促進させた。イスラエルに連れて来られた女性のうち自国でも売春していた女性は9%と少ない。29%が自国で無職だったと報告しており、仕事を有していた者でも、秘書、教師、裁縫師などの平均収入は月38ドルだったという。

性業界で売買される女性のほとんどがイスラエルとエジプト間を輸送されるが、ここは武器の輸送や麻薬の密輸入にも使われている。入国は、車での輸送、または、徒歩になることもあるが、その行程は過酷である。報告によると中にはベドウィン人密輸入者達に殴られ、レイプされる者もいる。そして、イスラエルに入ると売春業者に売られてしまう。イスラエルでの女性の売買は4000ドルから10000ドルでなされ、女性の容姿、年齢、肌の状態、出産経験数、過去の売春経験によって判断される。

4000ドルから10000ドルで女性が人身売買されている

雇用者の元に送られる頃には逃亡防止の為にパスポートは没収され、身元確認の術も、外国での人権も一切残らない。

ゼヒラ(仮名。ウズベキスタン出身の人身売買被害者)が出産をした時、テルアビブのソーシャル・ワーカーから入院中の訪問依頼を電話で受けた。病院に着くと、ゼヒラは赤子を捨て、売春と麻薬が盛んな地区に逃げたと聞かされた。私たちは車で町を探しまわり、彼女が働く売春宿で彼女を見つけた。私にとっては、売春宿を訪れることも、売春婦と話すことも初めての経験だった。彼女をどう助ければいいのか、神の助けが必要だと感じた。話し合いの中で、週に一度私たちが送迎をし、病院の赤ちゃんを訪ねることを提案した。彼女が赤ちゃんと触れ合う中で、母性本能が目覚め、売春と麻薬の世界から足を洗うきっかけになってほしいと願ったのだ。

5ヶ月強の間、私たちは売春宿に出向き、彼女と病院の赤ちゃんを訪ね、麻薬中毒状態で生まれた男の子を見舞った。その間、彼女は虐待に満ちた人生について語ってくれた。ゼヒラはこの国に連れてこられる時、エイラートのアパートに監禁

**1990年代から
特にソビエト連邦崩壊後
イスラエルは人身売買の
ターゲット国と
なってきた。**

され、所有物を一切持てず、尊厳や基本的人権さえも失うとは想像もしなかっただろう。アパートから逃げだした彼女は社会の隅で最低限の生活環境も整わないまま、外国の地で生きる為に売春を続けた。

私たちは毎週テルアビブのバス・ターミナル近くにある売春宿に足を運んだが、子供の頃からなじみがあったこの地域は変わり果てていた。部屋はすべて売春宿になり、廊下や裏庭は麻薬接種の場と化していた。何千人もの難民が歩き回っている中、少女たちが殴られ、白昼堂々と殺人事件まで起こるような場所であった。最近、メディアでも大きく取り上げられ、売春宿が閉ざされるようになった。その代わりに難民の為のカフェが開店した。しかしながら、その努力も、一時的に少女たちが散らされ、かえって広い地域に売春が広がるという結果に終わっている。

こうした絶望的に見えるような状況の中でも、中絶をせずに子供を産んでくれた売春婦や、麻薬中毒から抜け出すためのリハビリに取り組み始める女性、また、イエスへの信仰を持って救われる女性までもが起こされている。

イエスは彼らに言われた。「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。」(マタイ 21 章 31 節)

レッドカーペット

ナディアは砂の上に座っていた。その姿から、何日も路上生活をしていたことは明らかだった。周辺はひどく汚れていた。すぐ近くで、別の女の子たちがヘロインを打っている。ナディアは麻薬の影響下にあり、会話さえ成り立たなかった。ただ、赤く膨れ上がって痛む足の指をさすり続けていた。手を置いて祈ることしかできなかった。自分たちの力のなさを嘆きつつ、その場所を後にした時、ネイルサロンを開くというビジョンが生まれた。それから数ヶ月後、私たちは「レッドカーペット」というセンターを開設した。

2011 年から、これまでに約 60 人の女性が訪れた。話を聞いてもらい、祈り、温かい食事を食べるために、再び戻ってくる女性もいる。ユダヤ人、アラブ人、旧ソビエト連邦から来た女性（モルドバ、ウクライナ、ベラルーシ等)、中にはヨーロッパや東アジアから来ている女性もいる。彼女たちは全員売春婦で、多くは麻薬中毒者でもある。また、性転換者と同性愛者の男性もセンターを訪れた。ネイルをしている間、彼らの話を聞き、アドバイスを与え、福音を語り、彼らと共に祈り、できる限りの助けを提供している。毎週、6人の女性スタッフがセンターに来ている。

イエスがイスラエルに来たなら、まず、テルアビブの中央にあるバスターミナルにくるだろう。そして、サマリアの女に出会い、マグダラのマリアに出会うだろう。彼女たちは、イエスしか与えることのできない「希望」を待ち望んでいるのである。もし、私たちがイエスの手足とならなければ、どのようにして、それが起こりえるだろうか。

イスラエルにおける売春禁止法

マティ・ショシャニ

2012 年現在、イスラエルでは売春は合法です。「顧客」も犯罪者ではありません。

公式調査によれば、若者から大人に至るまで、約 15,000 人の女男が金銭目的で性的サービスを提供している。毎月、1,000,000 件以上の「性的行為の売買」があると考えられる。少なく見積もっても、毎年 24 億シェケル (670 億円) の利益を出しているとの報告もある。2006 年に、売春を禁止する法案が初めてクネセト（イスラエル議会)に提出された。この法によると、顧客側(ほとんどの場合が男性）の責任が問われ、スウェーデンで成功している例に習って懲役の刑が施行される。刑は懲役 6 ヶ月または、初犯の場合は、社会奉仕と売春に関する授業を受けることが求められる。

現時点でも、この売春防止法に違反した者は数多く、その中には売春勧誘、売春宿と未成年者の勧誘なども含まれる。しかし、法が実際に施行されるケースはとても少なく、逮捕者数は非常に少ない。法による防止効果が乏しいのが現状である。

「幸せな売春婦」神話

イスラエルで、人々に売春について質問をした場合、次のような使い古された回答が帰ってくるだろう。「自ら選んで売春をしているのだ」「セックスを楽しんでいるのだ」「彼女たちは大金を稼いでいる」「辞めたければいつでも辞められる」これらの考えは、真実からは程遠い。売春の現実は、どう見ても悲惨である。売春婦として働くほとんどの女性が幼少時代に性的虐待を受けており、若い時期に「ギフト」目的で肉体関係を持っている。時間とともに彼女達は性業界に流れ、ストリップクラブやマッサージ・パーラー、または売春宿で働くようになる。そして大半が麻薬中毒になり、売春のトラウマから逃れる為にアルコール中毒になる。売春婦達は日々、暴力、レイプ、強盗、屈辱に曝されている。彼女達は自分の経験を「終わりの無いレイプだ」と言う。過去のトラウマに苦しむ売春婦の確率は戦争からの帰還兵よりも高い。

JERUSALEM INSTITUTE OF JUSTICE

IF YOU ARE INTERESTED IN VOLUNTEERING, PLEASE CONTACT ME BY MAIL AT:
mshoshani@jij.org.il

イスラエル社会全体の売春に対する「寛容」が、改善が困難である主な原因である。多くの人々は、お金のために自分の体を売っている人に気付いておらず、無関心である。

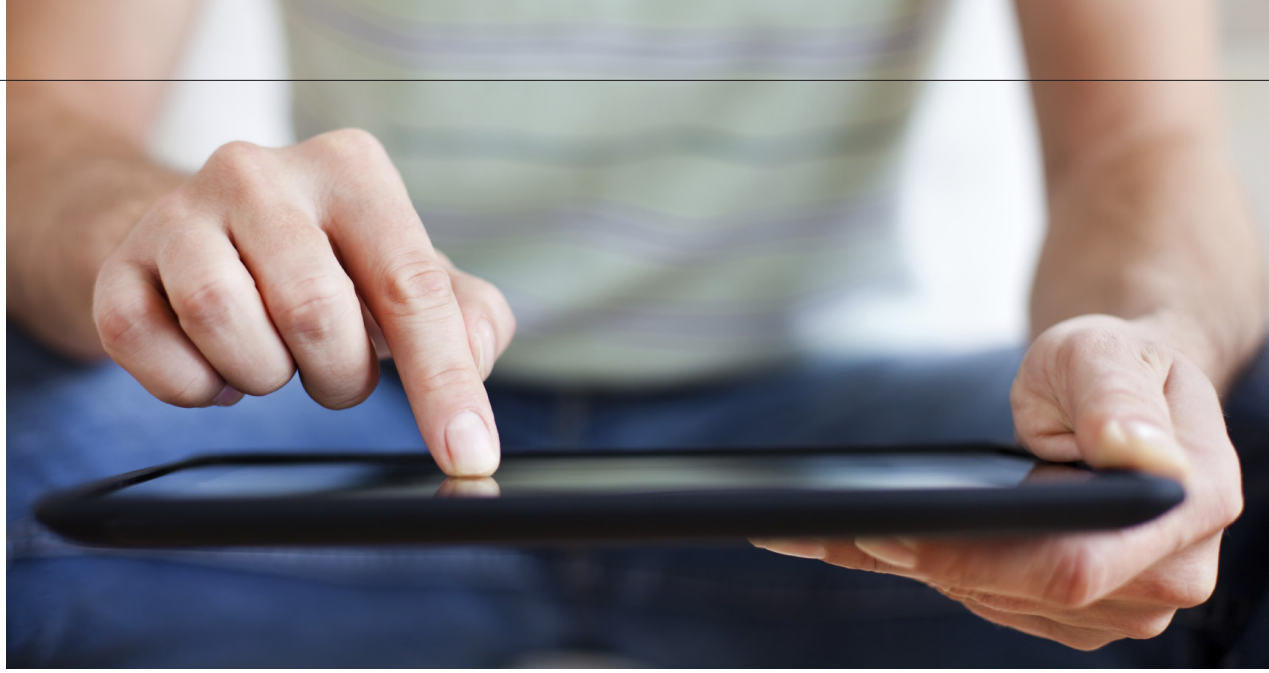
私は、イスラエル国内の社会正義促進を目的とする「エルサレム司法研究所」に勤務し、人身売買と売春の防止を促す「売春禁止法案」の可決に向けて活動をしている。その活動は、主に以下の３つに重点が置かれている。法的活動：人身売買と性的搾取の被害者に法的な助けを提供。政治的活動：クネセトでロビー活動をし、オリツ・ズアレッツ、他と協力。そして、社会的側面として、ボランティアが直接クネセトのメンバーに働きかけ、法案の重要性を伝えている。これらの活動は、ソーシアル・ネットワーク、印刷物、デジタルメディアなどを活用しながら進めている。

この法案は既にクネセトでの予備読会を通り、女性の立場を向上するために置かれた特別委員会で審議中である。私たちは、近い将来、この法案が第二読会、第三読会を通ることを期待している。現在は、選挙を秋に控えている為、新議会がこの法案を可決するのを待たねばならない。

この活動の特徴は、法案が問題に対する人々の声を繁栄するものではなく、むしろ社会の意見が変わる前に動き出している点である。

この問題は、イスラエル社会の繊細な部分に触れ、モラルに関する難解な質問を生み出すため、しっかりとした「話し合い」が必要である。最初にこの法案への投票があった時、人身売買と売春の問題が大きくメディアに取り上げられた。今回の売春の問題や、人々の「信念」に関わるような重要な問題に取り組み、根本的な変化がその社会の中で起こるためには、公共の場での議論がしっかりとされなければならない。

社会を変える為には、たえず活動し、世論を変えていかねばならない。このような問題は、議会の力だけで解決することはできない。何千人、何万人という「個人」が立ち上がった時に初めて可能になるのだ。



インターネットを通した

エイタン・バー

顔と顔を合わせた交流に
勝るインターネット：
一人でパソコンに向かうとき
プライバシーの確保
無限の情報
仲間や家族の
プレッシャーからの解放を
得ることができる。

私は 2000 年代の初めにメシア信仰者の為のインターネットシステムを作り運営していた。そのシステムの閉鎖をした約 2 年後、そのシステムを通して信仰を持つようになった女性から、感謝の E メールを受け取った。彼女は、地元のメシアニック・ジューの集会に集うようになっていた。

この頃からオンラインでメシアに関する福音を発信するウエブサイトを立ち上げたいという思いが与えられた。オンラインの世界は、バアルにひざをかがめていない者が、霊的な探求をしメシアに出会うことができる絶好の場である。

ヘブル語の未信者向けとしては、初となるウェブサイトを作ることにした。（www.iGod.co.il）主が与えてくださった以下の二つの目的のためである。一つはインターネットを通して、ヘブル語を話す未信者にメシアニックの信仰を説くことである。世界中の誰もが、何かを調べるとき、インターネットを利用する時代である。グーグルで「イエス・キリスト」（ヘブル語では通称 A.V. と書く）「新約」「メシアニック・ジュー」などの検索をしたとき、どんな結果がでるだろうか。まず、私の頭に思い浮かぶのは「ヤッド・レアヒム」という反宣教師団体のサイトである。これが、イスラエルの中流階級（全てのことに対し疑問を持ち、論破しようとする傾向のある層）のカルチャーに合ったサイトを作りたいと思った理由である。

二つ目に、イスラエルの多くのメシアニック・ジューは、信仰について語ることを恐れている。自らの知識に自信がなく、質問に答えることがで

サイト記事・アクセス・ランキング上位　5位

» 49,000件«　なぜユダヤ人はイエスを禁止するのか
» 39,000件«　三位一体とは？神はどれだけいるのか？
» 31,000件«　メシアはいつくるのか？（ダニエル9）
» 26,000件«　なぜ、性的関係と人間関係を求めるのか？

ヘブル語での伝道の働き

きないと感じているからである。私たちのメシアニックサイトには、メシアニック・ジューが最も頻繁に受ける質問とその質問に対する答えを掲載している。「そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」（第一ペテロ３章 15 節）

その後、他のウェブサイトの制作などにも携わってきた。今後は、ビデオやオーディオの分野にも力を入れ始めたいと願っている。一年以上前から、ウェブサイトに加え「メシアニック・ジューへの質問フォーラム」を始めている。各ウェブサイトを繋げ、できるだけその場で質問に答えようとしている。このフォーラムを通して、５人のイスラエル人が救われたことは本当に喜ばしい出来事であった。

「インターネットか現実か」という議論がなされることがある。もちろん、インターネットは集会の代わりにはならないことは明確にすることが大切だが、私は「顔と顔」と「顔とスクリーン」の違いがあまりない世代に生きており、もちろん神はどちらかに限った方ではないと思う。

今日、インターネットは世界で最も実り豊かな福音伝道の手段である。インターネットには、顔と顔を合わせた交流に勝る側面がある。一人でパソコンに向かうとき、プライバシーの確保、無限の情報、仲間や家族のプレッシャーからの解放を得ることができる。しかし、私達は人々をインターネットの世界だけにとどめて置きたくはない。彼らが確実に地域の集会に繋がるように配慮し続けている。

2012年6月
15000人以上の
ヘブル語を話す人が
IGOD.CO.IL
のサイトに訪問した。

私たちは、次の段階へと働きを勧めている。イスラエル聖書大学と協力し、プロレベルのオーディオとビデオ機器を完備したテレビとラジオのスタジオを用意している。ウェブサイト「iGod.co.il」は未信者に、「messianic.co.il」は主にメシアニック・ジュー全体に「oneforisrael.org」は英語を話す信者向けに私達の活動内容をお伝えし、サポートして頂けるようにしている。